

もう夫婦ではない父と母がいて結婚式は静かに進む

「宇佐美さん」と他人のように母は呼ぶ、母には既に他人であればかすがいになれなかった子もいつの日か父となる日を夢に見ている

「離婚した親を持つ子」であることも終わりとと思う今日を限りに

『駅へ』（2001年）

三日月湖のように残りて旧道は青葉の深き影に沈みぬ

燃やされる、踏まれる、引きずり降ろされる、振られる、掲げられる 国旗は

そのむかし六つの村の合わさりて六ヶ所村となりしその村

投下する者の瞳に輝きて美しかりけん広島の川

黒ずみしバナナの皮に浮かび出る大東亜共栄圏のまぼろし

八月六日

夏が来るたびに箱から取り出して日本人はみなヒロシマが好き

「こどもの国」は旧陸軍田奈弾薬庫跡地にある

みどりいろの扉の奥にひとつずつ 蔵しまわれてある古き戦争

『やさしい絞』（2006年）

知覧特攻平和会館

敵艦の間近まで来て墜ちたれば溜息のごとき声は漏れたる

留守番電話るすばんでんわに父の声あり同居する弟の死を短く告げて

独身の叔父と離婚をせし父の二人暮らしはいかでありしか

川で泳ぎしことなきわれは山梨の川に息子を泳がせており

廃屋を串刺しにしてのびてゆく竹に斜めのひかりはそそぐ

『午前3時を過ぎて』（2014年）

この町の歴史をピンで刺すごとく樹齢七百年の杉の木が立つ

屋根瓦つらぬき通す木の力、草の力、蔦の力を生みたるちから

人住まぬ島に神社は残りたり注連縄にひとつ紙垂しでをたらして

母とともに暮らししはわずか二十年、二軒長屋に建て増しをして

『風のおとうと』（2017年）

冬晴れの掩体壕えんたいごうの暗がりに捨てられてあり赤い三輪車
日露戦役戦利品なる砲弾の錆びて茶色く碑の上に立つ

『紫のひと』（2019年）

僕の歌で、

夏が来るたびに箱から取り出して日本人はみなヒロシマが好き
という歌があつて、ついこの前「こえ」という雑誌で鈴木英子さんがこの歌を
取りあげ批判をされています。この歌は広島で実際に被爆した方とか、被爆二
世の方が読んだとしても堪えられるだけの歌なのかということを書いていまし
た。そういう問題というのは、社会的な問題について歌うときに、必ずあるん
だろうなというのをそのとき感じたんです。

歌を歌った段階では終われないということ。特に時事詠・社会詠については、
歌ったあとそれを読んだ人がどう思つて、どう感じて、どう反応するかという
ところまで含めて歌のつくり手が、僕が、責任を負うという感じですね。

『いま、社会詠は』（2007年）